

「春採湖物語」～キラリと光る宝たち～の成り立ちは

春採湖と歩む会代表

大日向 倫子

まだ春採湖にうっすらと氷が張っていた3月末に、今年の春一番の撮影は始まった。

残雪のある土手の中から顔を見せたキタミフクジュソウ、キバナノアマナ、エゾエンゴサク・・・と続くスプリングエフェメラルを前に、緊張して取り組んだなあと思うのは、いつもの年とは違い

「本にまとめるのだ」との意気込みが背中を押していたからに他ならない。

前年初夏、湖畔でのシマエナガ営巣～巣立ち迄のトピックスも、貴重な記録であり野鳥編では避けては通れない場面でもある。思いはいろいろと巡り、分かり易い解説、鮮明で美しい画像の記録をコンセプトに、ガイドブック「春採湖物語」の編集は緒に就いた。

市街地にありながら手つかずの自然が数多く残り、動植物たちの活動や営みを近くで目にする事の出来る貴重な宝庫。これらを88頁の決して厚くはない本の中で紹介するには、どうしてもある程度分野を絞らなければならなかった。そこで「ありのままの日常からの横顔」がヒントとなり、日々目にした四季の移ろいを素直な気持ちで書き綴ってみた。ゲラ刷りが届いてから校了までには多くの日数を費やし、体力・気力がこれでもう限界？と思った日さえ、今では懐かしい。そんな中での助成による収録の充実(頁数の増)や部数増へのつながりは、殊更嬉しく感じたのであった。

完成後のガイドブック「春採湖物語」～キラリと光る宝たち～は釧路市教育委員会を窓口、市内の全小中学校、図書館、博物館へ。且つ夏季長期滞在者様を担当の釧路市協働推進課をも含めた寄贈がすべて終了後、私の体からは何故かふわ～っと力が抜け行く様な感じがあった。

今迄の活動を纏めつつ、出版と言う「形に出来た達成感」とその後の数々の反響。ガイドブックでありながら、歴史ある春採湖周辺の内容や近隣に建つ学び舎特集が、故郷への懐かしさか掲載校同窓会を通じ、全国に広がる釧路出身の方へも伝わるなど、出版余波は続いた。

秋の一日、春採湖に近い小学校からの依頼を受けこのガイド本は一躍、総合学習の時間で郷土を学ぶ「副読本」への変身を見る。小学4年生全児童の輝く瞳を前に、動植物が自然の中で生き抜く姿を画像と共に紹介し、語ったことは貴重な体験でもあった。これらは私の、そして代表を務める「春採湖と歩む会」の活動である、湖畔をフィールドとした様々な調査や研修等に、今後の大きな力と励みになって行くであろう。

何かのきっかけを頂き、それをステップとして次の行動へとつながる。これはどんな時にでも常に起こり得るが、その機会に出合うか否かも大きい。

自然観察の分野から羽ばたき、その知り得た学びを一人から、より多くの人々へと伝えるネイチャーガイドへの歩み。出版出来た「春採湖物語」～キラリと光る宝たち～には、ガイドとして頂けた多くの皆さん達との出会いや情報もまた、キラリと光っていたと思うのだから。



(第三種郵便物認可) 2017年6月5日(月) 金川 路

春採湖と歩む会代表の大日向倫子さんがガイド本「春採湖物語～キラリと光る宝たち～」をこのほど自費出版した。まちの中で出合える豊かな自然の喜びを写真もふんだんに盛り込みながら紹介している。前田一步園財団の助成を受け、教育関係機関、施設に一部を寄贈する予定だ。(郷裕策)

春採湖の魅力ギュッと

大日向さんがガイド本出版

大日向さんが自費出版した「春採湖物語～キラリと光る宝たち～」

大日向さんは早く春採湖集も作製し春採湖の美しさをネイチャーセンターに勧めてきた。今回の「春採湖物語」は、8年前から春採湖を菜の花の里、96の、春頭に春採湖のマップを描き、周辺全体的な自然ガイドに始まり、紙製ネイチャーガイド、次に野鳥観察、春採湖の南側、に情報提供。また、写真、フォトギャラリーの構成で、まとめている。この中で、年々、妖精とも言われて人気、高いシマエナガのイラストが、作り、子育に、春採湖の魅力を多くの人に、特集している。

所を争っていたカメラマンが、一緒に撮ったのが、撮れ、う、カラスを心配、したりして、見守ったのが、象徴的だった。本は多くの、力を得て完成された。長期、滞在者を含めたガイド本として、活用してほしい」と大日向さん。300部を制作し、うち一部を寄贈するが、残りを製作費と6月中旬以降から提供する。問い合わせは事務局0154(2)9322へ。校舎1階の読書の喫茶・珈琲店でも取り扱う。

